すゞろごと

樋口一葉

ほとゝぎす

ほとゝぎすの声まだしらねば、いかにしてか聞かばやと恋しがるに、人の訪ひ来て、「何かは聞えぬ事のあるべき。我が宿の大樹にはとまりてさへ鳴くものを、夜ふけ枕にこゝろし給へ。近く聞く時は唯一こゑあやしき音に聞きなさるれど、遠くなりゆく声のいと哀れなるぞ」と教へられき。

時は旧き暦の五月にさへあれば、おのが時たゞ今と心いさみて、それよりの夜な〳〵目もあはず、いかで聞きもらさじと待わたるに、はかなくて一夜は過ぎぬ。

そのつぎの夜(よ)もつぎの夜もおぼつかなくて、何時(いつ)しか暁月夜(あかつきづくよ)の頃にもなれば、などかくばかり物はおもはする、いとつれなくもあるかなと憎くむ〳〵猶(なほ)まつに弱らで一夜(ひとよ)を待(まち)あかしゝに、ある暁のいとねぶうて、物もおぼえずしばし夢結ぶやうなりしが、耳もと近くその声あやまたず聞えぬ。まだ聞かざりし音(ね)をさやかに知るは怪しけれど、疑ひなきそれと枕(まくら)おしやりて、居直(ゐなほ)れば又一(ひと)こゑさやかにぞなく。故人(こじん)がよみつる歌の事などさま〴〵胸に迫りて、ほと〳〵涙もこぼれつべく、ゆかしさのいと堪(た)へがたければ、閨(ねや)の戸おして大空を打見(うちみ)あぐるに、月には横雲少しかゝりて、見わ

たす岡（をか）の若葉のかげ暗う、過ぎゆきけんかげも見えぬなん、いと口惜（くちを）しうもゆかしうも唯（たゞ）身にしみて打（うち）ながめられき。

　明（あけ）ぬれば歌よむ友のもとに消息（せうそこ）して、このほこりいはゞやとしつるを、事にまぎれてさて暮しつ。夜（よ）に入れば又々鳴きわたるよ。こたびは宵（よひ）より打（うち）しきりぬ。人の聞かせしやうに細（こま）やかなる声はあらねど、唯（たゞ）ものゝ哀れにて、げに恋する人の我れに聞かすなと言ひけんも道理（ことわり）ぞかし。おもふ事なき身もと、すゞろに鼻かみわたされて、日記のうちには今宵（こよひ）のおもふこと種々（くさ〴〵）しるして、やがて哀れしる人にとおもふ。

かくて二日ばかり、三日の後なりけん、ゆくりなく訪ひ来し友あり。いと嬉しうて、今やこの事かたり出ん、しばししてや驚かすべき、さこそは人の羨やましがるべきをと、嬉しきにも猶はゞかられつゝ、あらぬ事ども言ひかはすほどに、折しもかの子規軒端に近う鳴く声のする。「あれ聞き給へ。此宿はこゞゐの森にもあらぬを、この夜頃たえせず声の聞ゆるが上に、ひるさへかく〳〵」と打出したれば、友は得ときがたきおもゝちして、「何をかのたまふ」とたゞに言ふ。かく〳〵と語れば、「そは承けがたき事」と打かたぶき打かたぶきするほどに、又も一声二声うちしきれば、「あ

れが声を郭公(ほとゝぎす)とや。いかにしてさはおぼしつるぞ、いとよき御聞(おんき)きざま」と、友は口おほひもしあへず笑(ゑ)みくつがへる。「いつも暁(あかつき)よりなきいでゝ夕ぐれまでは御軒(おんのき)のもののなるを、いかにしてさは聞き給ひけん、物ぐるほしくもおはしますかな」といよ〳〵笑ふに、「さにはあるまじ。いかで山がらすをさはおもふべき。あの鳴(なく)ね聞き給へ、よもあやまらじ」と不審(いぶ)かしうなりて言へば、「月夜に寝ほうけて鳴出(なきいづ)る時は常の声とも異(こと)なりぬべし。今のなく音(ね)は何かは異ならん。あれ見給へ、飛びゆく姿もさやかなるを」と指さゝれて、あはれこの子規(ほとゝぎす)いつも初音(はつね)をなく物になりぬ。覚(さ)め

ずは夢のをかしからましを。

底本：「全集樋口一葉　第二巻　小説編二〈復刻版〉」小学館
1979（昭和54）年10月1日第1版第1刷発行
1996（平成8）年11月10日復刻版第1刷発行
入力：もりみつじゅんじ
校正：浅原庸子
2003年3月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。